

- (2) 精神疾患をもつ親の子どもへの支援 — フィンランドで開発された親と子ども・家族へのアプローチ —

(看護学科) 上野 里絵

- (3) Therapeutic potential of fingolimod and sphingosine kinases inhibitors in myeloma cells
(フィンゴリモドとスフィンゴシンキナーゼ阻害剤の骨髄腫細胞株に対する抗腫瘍効果)

(血液内科) 田中 裕子

■特別講演

- (1) 乳癌治療の個別化を目指して

講演者 石川 孝 主任教授 (乳腺科学)

座長 三木 保 主任教授 (医療の質・安全管理学)

一般演題: P1-1~20、P2-21~P2-42、P3-43~P3-59

P1-1.

抗菌薬による薬剤熱の臨床的特徴

(社会人大学院博士課程2年微生物学、感染制御部)

○藤田 裕晃、小林 勇仁

(社会人大学院博士課程3年微生物学、感染制御部)

月森 彩加

(感染制御部)

佐藤 昭裕、中村 造、水野 泰孝

(微生物学)

大楠 清文、松本 哲哉

【背景】 抗菌薬による薬剤熱の実態を明らかにし、早期診断に役立てることを目的とした。

【対象と方法】 後方視的に診療録を調査した。2012年9月1日~2015年3月3日までに抗菌薬投与による薬剤熱と診断した21例を対象とした。診断基準は ① 抗菌薬投与中に発生する37.5°C以上の発熱で2日間以上持続する。② 他の熱源が否定されている。③ 被疑薬の中止で解熱する。を全て満たすものとした。項目は、抗菌薬の種類、性別、年齢、被疑薬投与期間、被疑薬中止から解熱までの期間、CRP上昇の有無とした。

【結果】 種類はバンコマイシンが6例(24%)、アンピシリンスルバクタムが3例(12%)、シプロフロキサシンが2例(8%)、クリンダマイシンが2例(8%)、セフェピムが2例(8%)、セファゾリンが2

例(8%)、アンピシリンが2例(8%)、ST合剤が1例(4%)、セフトリアキソンが1例(4%)、セフォチアムが1例(4%)、ピクシリンが1例(4%)、メトロニダゾールが1例(4%)、アムホテリシンBが1例(4%)だった。男女比は10:11、平均年齢は59歳だった。平均薬剤投与期間は10.2日(1-33日)、解熱までの平均期間は1.8日だった。CRP上昇をきたしたものは11例(52%)(2.1-32.4 mg/dl)だった。【考察】 本研究ではバンコマイシンが被疑薬となった率が最も高かった。被偽薬投与期間は1日から33日と幅があり、リスクとなりうる投与期間を推測することはできなかった。薬剤熱の経過中に測定されたCRPの最高値は32.4 mg/dlであり、薬剤熱によってもCRP上昇をきたす可能性が考えられた。

P1-2.

Candida 細胞壁 β -glucan 刺激好中球による NETs 形成の検討

(東京薬科大学:薬学部 免疫学教室)

○石橋 健一、山中 大輔、安達 禎之
大野 尚仁

(八王子:腎臓内科)

吉田 雅治、尾田 高志、山田 宗治

【目的】 好中球は、真菌感染に対する生体防御反応において、主たる役割を示す細胞の一つである。